

跑馬山観光を終え、再び地上で赤シャツと合流した次仁扎西と私は、稲城の少女といつの間にか現れたその母親も加わって5人グループとなると、最初に始めたのは今夜の宿探しだった。

とは言っても、私の宿は既に荷物を置いてきた黒帳篷ゲストハウスに決まっていたので、探したのは稲城一行の4人が泊まる宿だ。外国人目線とは一味違う、地元の人間の宿探しに同行するのはとても面白かった。

中国世界からチベットエリアへの中継点となる康定の街中には、安宿から高級？ ホテルまであらゆる宿泊施設がひしめきあっているのだが、表通りに「宿宿」の看板を掲げているような判り易い宿の他にも、裏路地やビルの間隙間に外国人の目には見えないような小さな宿が詰まっている事を彼らに同行して初めて知った。土地の人間でなければ入っていく勇気が出ないような、おんぼろビルの間隙間の宿でも、中に入れば結構な広さの快適そうな部屋があったりして、そのくせ立地の悪さからなのか、彼らと見て歩いた部屋は何処もずいぶん安い。宿探しが面倒な私は、とにかく眠れさえすれば良いと、あまりこだわらずに最初の宿に決めてしまう事が多いのだが、彼らは慎重にあちこち見て回っては、宿の女将に値下げ交渉を持ちかけたりしていた。

ああ～～、残念。こっちで皆と泊まる方が断然面白いし、宿代も安かったのになあ・・・

2人と出会って早々に、わざわざバスターミナルから遠く離れた外国人用のゲストハウスなんかにはチェックインした事が非常に悔やまれた。君もこっちに泊まればいいじゃん。私の気持ちを見越したように、赤シャツ達が言ってくれたが、時既に遅しだ。

少女と母親、赤シャツと次仁扎西で無事に2部屋分の落ち着き先を見つけると、次は街の食堂で腹ごしらえとなった。赤シャツと次仁扎西はポンポンときっぴり良く料理を注文すると、テーブルいっぱいには並べた皿を前に、さあ食べる食べる！ とさかん勧めてくれる。先ほど合流した稲城の少女は康定の学校で学んでいるのだそうだ。この日は休暇で帰っていた稲城から戻って来たところで、チベット服に身を包んだ母親は少女を康定まで送って来たとの事だった。

出会ったとたんに私を仲間に引き入れてくれた赤シャツと次仁扎西に加え、少女も彼女の母親も目が合う度にニコニコと優しく微笑み、たくさん食べてねと声をかけてくれる。次仁扎西以外のメンバーはつい先ほど知り合ったばかりだが、まるで旧知の友人と一緒に居るみたいな親しみが感じられる。

こんな風に仲間と談笑しながら食べる食事って、何て美味しいんだろう。これまでの旅の間は、その殆どを一人でボソボソと一杯の麺を嚙ったりして、単に食欲を満たすだけのような食事を繰り返してきた私だ。こうして旅の最後に孤独から解放され、仲間と談笑しながら食べる食事が与えてくれる幸せをしみじみと身に染みて感じ、旅の最後にこんな食事の機会を与えてくれた神様に、心の中で感謝した。

食事の後は皆で康定の街を練り歩き、次から次へと立ち並ぶ商店を冷やかして歩いた。肩で風を切って先頭を歩く赤シャツは、洋服屋に飛び込むと、そこに掛けてあったジャケットを羽織り、大きな鏡の前でモデル張りにウォーキングを披露したかと思えば、私達が服を見ている一瞬の間に姿を消してしまい、気づけば今度は隣の床屋でケープを纏い、理容師に髪を整えさせながら鏡に向かってすましていたりして、本当に面白い奴だ。

次から次へと飛び跳ねるように康定の街を流していく彼らと一緒にいると、まるで自分がテンポの良いコメディ映画の登場人物にでもなったような気分だった。私は楽しくてずーっと笑っていた。

そんな康定散歩の合間、道端の縁石に座って、一時の休憩を取っていた時だ。赤シャツが突然真顔になって私に尋ねた。

「君は俺たちの事をどう思う？」

「え？」

「俺たちが恐いと思うかい？」

「ええ!? 全然怖くないよ。なんでそんな事聞く？」

唐突な質問に多少面食らった私が聞き返すと、赤シャツが重ねて問いかけてきた。

「会ったばかりで怖いと思わないのかい？俺たちが信じられるのか？」

「だって、いい人か悪い人かなんて直ぐわかるよ。悪い人はいっぱいいるけど、あなた達は信じられるから全然怖くない。私達は友達でしょう？」

私は笑いながら答えた。

「君は変わってるな。外国人でこんな風に俺たちと付き合う人間はいないぜ」

「だって2人はいい人だから」

「そうさ。俺たちとなら、一年一緒に居たって問題なんか起こりっこないぜ」

「うん。次に私が稲城に行った時は絶対あなた達のタクシーに乗るよ」

徐々に日が落ち、辺りが薄暗くなってくると、

「よし、今度はディスコに行こうぜ！」

赤シャツが言った。

ええ～？ まだ夕方だし、こんな時間に行くディスコって何だろう？ 半信半疑で赤シャツについていけば、目的地は街の中にある広場なのだった。

そう、この康定の街では毎日夕方になると広場のスピーカーから音楽が流れ、広場集まっている大勢の人達が一斉に踊り出すのが日課となっているのだ。特に踊りのルールなどが設けられている様子も無く、流れている音楽に合わせ、フォークダンスの様に踊るグループもあり、自己流で踊る人もあり、とにかく老若男女が入り乱れ、向い合わせで満面の笑みを浮かべながら、誰もがとても楽しそうに踊っていた。

たまたま広場のベンチで休んでいた私が初めてこのダンスに遭遇した時は、突然何が起こったかと驚いたが、その後いつ康定に行っても、この夕方のダンスは行われていた。きっとラジオ体操のような感覚なのでは？ といった感じだ。康定市民は毎日の習慣として夕方になると自然に広場に集い、街のスピーカーから音楽が鳴る一時を、ダンスを楽しみながら汗をかき日々の健康増進に努めているのではないだろうか？ と勝手に想像していた。

それにしても、踊っている人々は誰もがニコニコとなんだかとても楽しそうなのだ。人がこうやって自然に集い、毎日踊りながら暮らしている街なんて、なんて素敵なんだろう。こんな事が日々あたりまえに行われる街に住む人達が羨ましく思え、ちょっと自分も踊りの輪に加わりたような気持ちを抱えながらも、よそ者の寂しさで眺めているだけだったのが、旅の最終日にして、そんな踊りの輪に加わる事となったのだ。

仲間がいるって楽しいな・・・彼らと共に過ごせるのは今日一日だけだと思いつくと、胸の奥がキュンとした。もっと彼らと一緒にいたい。明日二人と一緒に車に乗って、また稲城に戻れたらいいのに・・・だが、いつしかとつぱりと日は暮れて、私はそろそろ自分の宿へと戻るべき時間になっていた。名残り惜しいのは山々だが、いくら引き延ばしたところで別れの時間はやってくる。どこかで気持ちに区切りをつけなければならぬのだ。ねえ、私はもう自分の宿に戻る事にしよう。私がそう切り出すと、白タクの2人は驚いたように、あんな宿まで戻る事ないさ。俺たちの部屋と一緒に泊まればいいよ。と口ぐちに引き留めた。

「だって荷物はあっちの宿に置いてあるし、明日の朝は成都に戻らなきゃならないから・・・」

「なら今夜はこっちに泊まって、明日の朝荷物を取りに行けばいい」

引き留めてくれたのは赤シャツや次仁扎西ばかりで

なく、少女の母親までもが、私達と一緒に泊まりましょう？ と熱心に声をかけてくれていた。皆が私をこんな風に仲間として受け入れてくれていた事に、少し胸が熱くなる。本心を言えばこのまま彼らとここに就いて、一緒に泊まりたい気持ちでいっぱいだったが、既にこちらの宿で宿代を払っていたし、シャワーを浴びたら着替えもしたい。今日一日の汗でベトベトになったままの服で眠り、明日の朝になってから遠くの宿まで、わざわざ荷物を取りに往復するのは、ちょっとご免だ。

後ろ髪引かれる気持ちを振り切って、それを彼らに伝えると、判ったよ。だったらここから宿まで送ろうか？ と赤シャツが言ってくれた。ううん、いい。私はかぶりを振った。せっかく隠してある二人の車を出してくるのは危ないし、ここからはタクシーで帰るから大丈夫。私はそう答えると、皆と手を握り、また稲城で会おうね、と約束してお別れした。

赤シャツと次仁扎西が私の為にタクシーを拾ってくれようとして、道に乗り出した時だ。一台の車が私達の前にスッと止まって窓を開けた。

「ええええ～～～～!!」

赤シャツと次仁扎西が駆け寄って嬉しそうに話しかけている運転手の顔を見て、私も思わず歓声を上げた。

なんて事だろう。運転席で笑顔を見せていたのは、私がひと月前アロン達と亜丁に向かう際、私達を乗せたタクシーの運転手なのだ。亜丁の入場料を逃れる為に早朝のゲートを暗闇に紛れて突破し、朝日に輝く神の山と一緒に眺め、「そんなに亜丁が好きなら、この土地の男と結婚すればいい」と笑っていた彼だ。

運転手は私の顔をみるとニコリと微笑んだ。

「やあ小姐、亜丁は楽しかったかい？」

この後に及んで、まだ稲城の知り合いに会うなんて!!! チベットの神様が用意してくれた最後のサプライズ・プレゼントで、孤独な一人旅の最後の仕上げは大勢の仲間にもまれて、まるで大団円のような幕切れとなった。

その場でまたひとしきり亜丁の思い出話に花が咲き、いよいよこの場から立ち去り難く思われた私だったが、このままズルズル過ごしてしまえば後できっと後悔する事になる。今日一日の様々な出来事でだいぶ疲れてもいた私は、意を決して皆にいとまを告げた。

赤シャツが拾ってくれたタクシーに乗り込み、何度も彼らに手を振ると、車の窓から道路脇の食堂に入っていく彼らの姿が見えなくなるまで目で追った。

車を飛び下りて、彼らの後を追いかけていたい気持ちを押し殺し、本来なら旅が終わる寂しさに耐えながら、しょんぼりと孤独に過ごす事になったであろう康定最後の一日を、こんなに楽しい日にくれたチベット神様に心から感謝した。

(次号に続く)